

あそぼう、遊ぼう！



ZAIHOO代表
はっんの
「僕はちよっとひめいをあげて」

僕

川辺でおねえさんの横に座って、なんにもすることがないのでとても退屈していました。二回はおねえさんの読んでいる本を覗いてみたけれど、そこには絵も会話もないのです。「絵や会話のない本なんて、なんの役にもたたないじゃないの」と僕は思いました。そこで僕は、頭のことで、ヒナギクのくさりを作ったら楽しいだろうけれど、起きあがってヒナギクをつむのもめんどくさいし、どうしようかと考えていました。そこへいきなり、ピンクの目をしたフレンチブルドッグが近くを走ってきたのです。それだけなら、そんなにめずらしいことでもありませんでした。さらに僕としては、そのフレンチブルドッグが「どうしよう！ どうしよう！ ちこくしちゃうぞ！」とつぶやくのを聞いたときも、それがそんなにへんてこだとは思いませんでした。でもそのフレンチブルドッグが、チョッキのポケットから懐中時計をとりだしてそれをながめ、そしてまたあわててかけたとき、僕もとびあがりしました。というのも、チョッキのポケットなんかがあるフレンチブルドッグはこれまで見たことがないし、そこからとりだす時計をもっているフレンチブルドッグなんかも見つけないぞ、というのに急に気がついたからです。そこで、興味津々になった僕は、そのフレンチブルドッグのあとを追っかけて野原をよこぎって、それがしげみの下の、おっさな穴にとびこむのを、ぎりぎりのところで見つけました。次の瞬間に、僕もそのあとを追っかけてとびこみました。いったいぜんたいどうやってそこから

出ようか、なんてことはちよっとも考えなかつたのです。その穴は、しばらくはトンネルみたいにまっすぐつづいて、それからいきなりズドンと下におりていました。それがすごくいきなりで、僕は知らないうちに軽く意識を失ってしまいました。

ん……あれ……ゆっくり目をあけながら首を振る僕。どれくらいの間こうしていたんだろう……。ん？ なにここ？

目の前には規則正しく並ぶ黒い鉄格子。その背景に広がる白い壁。壁の左奥には扉がみえる。定まらない思考。なにここ？ どこ？

「おはよ！」突然ひらく扉。満面の笑みで入ってくるキュービー。うわ！ びっくりした、キュービーか……。あ、びっくりした……。驚いたせいなのか、一瞬、僕の全身の毛が逆立った。それでもキュービーとわかつた瞬間に安心した。安心したしすこくうれしかった。キュービーに会えたことがそこまでうれしいか？と思うほどに。いや、なんだかもう、うれしいを超えて愛しさすらある不思議な感覚。なぜ？

キュービーがいつもどこか違うのか？ いつもより可愛くなったのか？ キュービーの顔をまじまじと見上げる僕。いつもと同じキュービーの顔。さらに顔から全体をなめるようにして見る。いつもと同じ僕からだ。ん？ いつもと同じ？

「！」
キュービーの顔から下……僕のからだ？ 顔キュービー。からだ僕。ええ！ 何これ？ 気持ちわる！ ええ？

気持ちわる！ ええ？

「はっん、オスワリ！」

無意識に反応してお尻を下げる僕。え？ あれ？ なにこれ？ オスワリって？ ええ？ けして嫌じゃない。いやむしろ、オスワリと言われて、何かしらの期待感をもちながらお尻を下げた僕。

「良い子だね、よし！」キュービーは僕の頭をこねくり回したあと、目の前にドッグフードの入った器を置いた。間髪入れずに器に顔を突っ込む僕。ほおばる、ほおばる、ほおばる、完食。もうないの？ もうないの？ もうないの？ 器を愛しくなめ回す僕。「はっん、美味しかった？」声がしたほうに振り向く僕。隣の鉄格子の奥にいるのはダッコ？ ダッコ？ え？ あ……。ああ……。そっか……。そういうことか……。僕がいるのは鉄格子の中ではなくケージの中だった。隣のケージにはダッコがいた。ということは、僕の下ケージにはアン。ダッコの下ケージにはペンツがいることになる。この状況はよく理解している。そもそもこのケージの配置をしたのは僕なのだから。ただ、でもなんで今この状況になった？ どこからこの状況になった？ どこから？ どこから？ 記憶を戻し始めようとした僕は、ふとダッコのフードの器に反射して映る自分の目を奪われた。

「！」
驚愕、絶叫、絶景、絶倫、嗚咽、頭痛、生理痛、のどの痛み、関節の痛み、嘔吐下痢症、お産、釜山。反射して映るその姿。顔は僕。からだはキュービー。そりゃそうか……。気付くべきだった

た……。キュービーを見たときに可能性があることを。それにしてもパイドか……。せめてフオンなら、僕のヒゲ面でもブラックマスクっぽく……。まあ、ここまできたら関係ないか。

「はっん、そろそろ日向ぼっここの時間だよ！」キュービーに抱えられ、庭のデッキに連れて行かれる。それどころじゃないよと思う僕の頭。お尻をブンブン振って喜ぶ今の僕からだ。キュービーは僕をデッキに放出すると、すぐ戻っていった。きつと次のダッコを迎へに行ったのだろう。僕はデッキをふたと歩き、適当な日向を見つけてふせた。足を前後に伸ばし、お腹と顎を床につけてふせた。なんだかやたらと落ちてくその姿勢でふせた。太陽の光がやさしく全身を包みはじめた。ぽかぽか陽気に1分もしないで眠気が襲ってくる。うとうと目が泳ぎはじめ、視界が揺れ始めた。

その時、揺れる視界がデッキの中央に無造作に転がっているボールを捉えた。一瞬、目を見開く僕。ああ、なんだボールか……。ボール？ ボール！ 反応するからだ、ボールをくわえて走りだす僕。ボールをくわえて狂ったようにデッキをグルグル回りだす僕。全速力でグルグルグルグル。そのタイミングでデッキに放出されたダッコ。もちろん僕を全速力で追ってくる。止まらない僕。追ってくるダッコ。そこに放出されたベント。止まらない僕。追ってくるダッコ。追ってくるベント。そこに放出されたアン。止まらない僕。追ってくるダッコ。追ってくるベント。追ってくるアン。ダッコ、ベント、アン、が僕の大好きなボールを奪おうと必死

に追いかけてくる。逃げても逃げても追いかけてくる。さすがにスタミナが切れはじめた僕。とうとうコーナーに追い詰められ、3頭に囲まれた。それでも僕は大好きなボールを死守しようとコーナーに頭を向け、3頭にお尻を向けながら、飛びかかってくるタイミングを見計らう。自分で自分をメッシュだと洗脳する。たかが3頭くらい軽く振り切つてやる。最初に迫ってきたアン、それを交わした瞬間、横からダッコの前足に弾かれ転がるボール。転がったボールを間髪入れずにベントがくわえて走り出す。今度はダッコ、アン、僕、がベントを追いかける。すると、いきなりターンに失敗してころんだベントの口からボールが転がり、それをダッコとアンが同時にくわえ、引つ張り合いが始まった。一足遅れた僕は2頭の引つ張り合いの行方待ちながら右往左往する。起き上がってきたベントも僕と同じく右往左往しながら状況を見つめる。

次の瞬間、2頭の口からボールがはずれ、僕の目の前に転がってきた。すかさずくわえ、走り出す僕。またもや僕を追ってくる3頭。大好きなボールをくわえ走る僕。追ってくる3頭。僕の全身が天井知らずに高揚しているのがわかる。楽しい！楽しい！楽しい！ボールで遊ぶのって楽しすぎる！ボール大好き！ボール最高！ボールさえあればもう何もいらぬ。

「はっんー散歩いくよー」
うん！ 散歩いく！ キュービー散歩いくよ僕！ ボールより散歩。散歩最高。なんてテンションの上がるフレーズなんだ、散歩。誘われるというジャ

ンルで知りうる最高の位は散歩。キュービーが僕の首にリードをかけたくれた瞬間の幸福感。リードをかけた僕の顔とキュービーのからだの境目の部分が、一体どうなっているのかわからない。はもうどうでもいいと思える逸脱感。そう、きつと今だったら自由に大空だって飛べるはず。キュービーと並んでぐいぐい歩く僕。目の前の風景がどんどん変わり始める。そこらじゅうをクンクン匂いまくる僕。誘惑だらけの匂いはキリがないほどある。

ん？ んん？ こ、この匂いは？
たしか、あ、ああ、反応するお尻。あたりを見回す。前足に力が入る。自然に丸まる背中。突き出すお尻。漏れる吐息。うう、ろ、路上で、公衆の面前で、あ、僕は、あ、まさかこの僕、あ、ああああああああ、あ、は、あ、ふう。

「いい子だね、はっん！ トイレでできたの、えらかったね！」

褒められた！ キュービーに褒められた！ うれしい！ キュービーが褒めてくれた！ キュービーの目を見つめ、お尻を下げる僕。ポケットからミルクボールを取り出し、僕の口に入れてくれるキュービー。噛んだのか噛んでないのかわからない早さでそれを飲み込む。わかつているのは褒められてそれをもらえたという事実。こんなにうれしいことであるのか？ これ以上にうれしいことってこの世にあるのだろうか？ とさえ思う。軽快な足取りでさらに続く散歩。するとたどり着いた近所の公園。それほど広くはないが、中央にはそこそこなサイズの滑り台がある公園。

「はっん！ 今日は滑り台やろっか！」
キュービーが僕を抱っこして、滑り台の階段を上りはじめ。階段を1つ上るたびに広がっていく景色。思っていたよりすぐに滑り台の頂上についた。待つていたのは、キュービーと僕が同時にみることができるとその景色。キュービーは抱っこしたまま北を向き、僕に富士山を見せてくれた。キュービーは抱っこしたまま西を向き、僕に電車を見せてくれた。キュービーは抱っこしたまま南を向き、僕に桜を見せてくれた。キュービーは抱っこしたまま東を向き、僕に小川を見せてくれた。キュービーがいつぱい話しかけてくれるのがうれしくてたまらなかった。キュービーが僕の顔を何度も見してくれるのがうれしくてたまらなかった。キュービーが僕を強く抱いてくれていることがうれしくてたまらなかった。キュービーがずっと笑顔でいてくれることがうれしくてたまらなかった。

「よし、はっん！ いっしょに滑ろう！」
僕を抱いたまま滑り台をゆっくり滑り始めるキュービー。下がるたびに周りの景色が縮まっていく。僕は楽しいしうれしい。滑り台が残り半分のところになると、キュービーが、よし！というかけ声と共に一気に滑りだした。僕の顔を一気に風が撫でていく。そのまま勢いよく着地。それと同時に地面の砂利がキュービーと僕の上に舞いあがる。

僕はちよつとひめいをあげて、半分こわくて、それをほらいのけようとして、気がつく川辺によこになつて、おねえさんのひざに頭をのせているの

でした。そしておねえさんは、木から僕の顔にひらひら落ちてきた枯れ葉を、やさしくほらいのけていたところでした。「おきなさい、はっん！ まったく、ずいぶんよくねてたのね！」
「すっごくへんな夢を見たの！」と僕はおねえさんに言って、僕はこの不思議な冒険を、おもいだせるかぎり話してあげたのです。そして僕の話がわかると、おねえさんは僕にキスをして言いました。「それはとってもふうがわりな夢だったわねえ、ええ。でもそろそろ走ってお茶にいつてらっしゃい。もう時間もおそいし」そこで僕は立ちあがってかけたし、走りながらも、なんてすてきな夢だったんだろう、と心から思うのでした。



はっん

フレンチブルドッグ専門サイト「ZAIHOO (ザイホー)」代表。首までどっぷりフレンチブルドッグに浸かった36歳。現在は5プヒに囲まれながらフレンチライフの高みを目指す。ワイルドというよりはマイルドなタイプ。